

68

議會開設前の政變・黒幕政治
大正劈頭の政變等政界裏の裏話

物語

明治大正政變秘話

特252

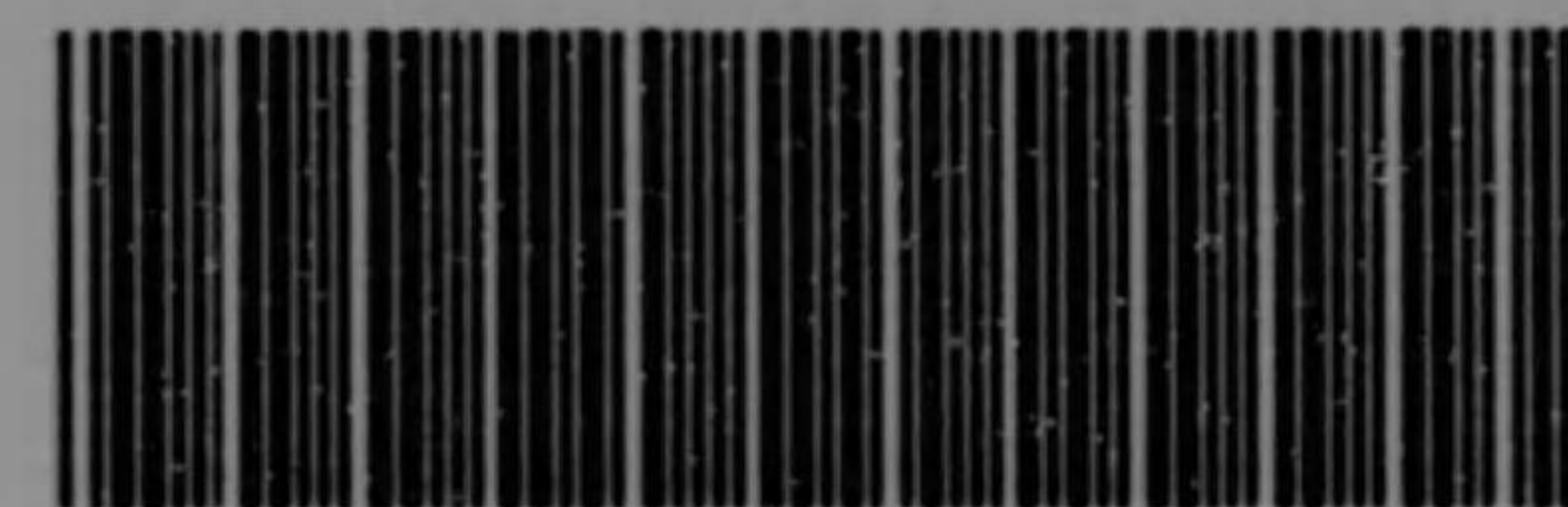
315

千田理示造著

前除

1

1



0005084000

0005084-000

特252-315

明治・大正政變秘話

千田理示造・著

森田書房

昭和11

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権第67条の規定に基づき、平成12年3月24日文化庁長官の裁定を受け使用するもので

持252

315

千田理示造著

明治・大正政變秘話(物語)

森田書房版

目次

議會開設前の政變……………(一)

黒田内閣出現と大隈入閣秘聞……………(三)

第一議會と山縣の操縦振り……………(三)

黒龍政治……………(一五)

空前絶後の選挙大干渉……………(一七)

最初の政黨内閣、維新以來の大政變……………(二〇)

肝膽相照時代……………(二五)

伊藤の政友會創立と金の出所……………(二七)

新人興起、情急投合時代……………(三三)

大正劈頭の政變……………(三七)

日本政黨小史……………(四七)

二大政黨系圖……………(四九)



明治・大正政變秘話(物語)

千田理示造

一、議會開設前の政變

◎議會開設前には、三の政變があつた。明治六年、征韓論をめぐる政變、十四年、大隈密奏事件に伴ふ政變、十八年、内閣制度確立に伴ふ政變等是れである。一般に前二者が、初期明治時代の二大政變と稱へられるもので、最後の政變は、是を單なる制度上の改革から、齎らされた一現象に過ぎないと見做されてゐる。

◎國會開設前までは、薩長土肥の権力の消長史で、絶えず、御殿女中式の暗闘は試みられてゐたが、火花を切るのが何時も朝鮮問題であつた。色んな異分子が、寄つてたかつて、出来上つた明治政府が、初めて大破裂をしたのは、明治六年の征韓論である。内部には種々な、こんがらがつた事

情があつたにせよ、表面の口實は何時も朝鮮問題であつた。明治十七年、後藤象二郎が、自由黨の壯士を擡げて、大陰謀を企てたのもさうだし、日清役日露役も、皆朝鮮問題が導火線を爲してゐる。是が明治六年、十七年、廿七八年、卅七八年、四十三年の五段階を経て、解決されてゐる。

◎明治六年政變のアウト・ラインを摘出すると、新政府組織以來、つもりに積つた、武斷派文治派の反目が朝鮮問題を挟んで、正面衝突を惹起したのだ。前年には、江藤井上の、豫身上での衝突があり、假りに、征韓論が擡頭しなかつたとしても、此の兩派の暗闘は、何かで爆發しなければ済まされぬところまで来てゐたのだ。

◎武斷派の頭目は西郷である。板垣、後藤、江藤、副島等が之に屬してゐた。文治派の頭目は、木戸と大久保である。大隈伊藤井上大木等が之を支持してゐた。三條はどちらかと言へば西郷派に近い人で、岩倉は、大久保に親近したやうである。

◎征韓のことは、岩倉大使一行の洋行中に既に御裁可を得て居たもので、岩倉の歸朝を俟つて、發表斷行するまでに、運ばれてゐたのである。ところが岩倉が歸朝すると、先づ大反對を唱へ出した——大久保と堅い握手が出来てゐたのである。西郷と岩倉の板挟みになつて苦惱したのは三條だつた。これが爲めに、遂に、病氣となり、執奏の重職に、堪へ得ざるに至つたが、文治派の乗じた

のは此の時であつた。即ち、岩倉をして、太政大臣の職を擡行せしめた——大久保利通日記に「只一の秘策あり、依て之を談ず、同人之を可とす」とある、秘策といふのは此の一事を指すのである。そこで西郷等征韓黨は、岩倉に迫つた。

「このことは曩に、廟議の一決する所、然も既に宸裁を経たもので、今更之を反古には出来まい」然るに岩倉は、頑として應じない。

「假令、陛下の御仰せが、如何あらせられても、此の岩倉が、眼玉の黒い間は、斷じて、お爲せ申さぬ」と嚴然と言ひ放つた。談判は遂に破裂した。

◎維新大業の、中心的人物は、何んと言つても岩倉である。實際の権力は、西郷大久保等の新興人物に、掌握された觀はあつたが、一旦、國家的重大事に、際會する場合、最後の歸決は、やはり岩倉等の一存にあつたことは此一事でも知られる。

◎ところで西郷外、板垣、副島、後藤、江藤の四參議は、飽迄征韓一點張りで、終始したが、大隈は、留守内閣にあつて、西郷に反對しなかつたが、明かに賛成もせず、岩倉の歸朝を、待つといふ程度であつた。然るに、大木は、明かに西郷に、賛成したのであつたが、岩倉の歸朝後に、寢返りを打つて、反對側になつた。そして留守内閣の謀議を、残らず岩倉等に、報道したものは、大隈だ

と傳へられてゐる。

◎朝議が、遂に非征韓論に傾くや、西郷等五參議を始め、桐野村山片岡林等、重もに薩士の將官が、連袂辭職した。時に明治六年十月廿三日、此の時の、參議連の年齢は、西郷四七、江藤三九、後藤三五、大久保四四、木戸四三、大隈三五であつた。それから三條太政大臣は三六、岩倉右大臣は四二で、五十臺のものは、一人もなかつた。西郷の一派が朝を去つた時、どうせ、無事では、納まるまいと、覺悟はしたものの、追がの岩倉も一時狼狽したといふことである。然し大久保が後繼内閣に就いて、辛辣な腕前を見せ、存分に乾分共を、要所に配置したので、さして動搖を起さないで、濟まされたのであつた。

◎征韓論閉議の一日、次のやうな挿話があつた。即ち明治六年八月十四日のことである。其の日の議論も却々面倒であつて、時間も長く掛かつて、もう日の暮合となつた。時に大隈參議が、席を起つて、三條太政大臣の席へ行つて、何か密々耳語いて、密と椅子を離れやうとした。之を見ると西郷は、

「大隈さん、足下、何處へ行きなされるか」
問はれて大隈は據所なく、

「實は、横濱の異人から招かれて、宴會に行くべき約束がありますから、是より中座いたします」
之を聞いた西郷は、眼を瞋して、大隈を睨み付け

「馬鹿ッ」
と大喝した。之には列席の、參議は皆、驚いて西郷を、熱と見詰める。大隈は顔を眞赤にして、下を向いてしまつた。

「毛膚人の馳走が、それ程に食ひたいか、國家重大の問題を閣議に於て、今評議して居る場合に毛膚人の宴會へ行かなければならぬというて、中座するとは怪しからぬ、馬鹿も大概にせい」
斯様な席に於て、是までに罵られても、大隈は返す言葉なく、悄々として舊の席に着いたのは、如何にも見苦しいことであつた。當時の大隈が、如何に貧弱な參議であつたか、思へば笑止千萬である。(明治裏面史による)

◎江藤新平の斷罪は、實に明治史の大汚點である。江藤は自分の作つた法律で、自分の首が斬られた譯で、恰度案の商榷が、やはり自分の作つた法規で苦んだのと似てゐる。

雪嶺博士の文中に「大久保は談笑を苟もせず、威儀を整ふるも、江藤に弱點を衝かれて、面目を失へること一再ならず。江藤は大久保の苦手として、生まれしが如き者にして、若し二人の問答を

速記せる所あらば、大久保の評價が、數段下落すべし。江藤は論鋒鋭くして、他の急所を突くも、胸に瘴氣なく、唯だ是非得失を判斷し、言はんと欲する所を言ふのみ」と。江藤を苦手としたのは、大久保ばかりでない、木戸然り、井上然り、殊に法制上の議論にかけては、江藤と太刀打の出来るものは先づなかつたと言つてよい。

◎十四年政變の真相は、巷間いろ／＼に取沙汰されるが、根本の動機は、やはり伊藤と大隈が、兩立し難かつたのに在る。大久保の死後は、參議の古參は大隈であつたが、藩閥の支持を得てゐる伊藤の爲めに、どうかすると壓され氣味であつた。

◎國會開設に關する意見書なるものが、諸參議から、有栖川宮に夫々奉呈してゐるが、此の中で大隈のものは絶対秘密といふ條件で、奉呈してあつた。所が、内容に重大な事項を記されてあつたので、宮は之を三條に御示しになり、三條から岩倉に傳へられたのである。岩倉が、又之を伊藤に語るに及んで、薩長政治家に知れ亙り、こゝに大隈の裏切り、背信を責められることになつたのである。

◎伊藤も大隈も、國會開設に關しては、比較的急進な思想を、持して居たので、相携へて、此の大業を成就すべきを誓約して居た。が、元來藩閥外の大隈は、藩閥の勢力が、大きくならない中に、

之を抑へ付くるには、何よりも國會の開設を急がなければならぬ。夫が爲めには伊藤との誓約を無視することも、止むを得ないとしたのであらう。大隈の私擬憲法によると「明治十五年議員を召集して十六年國會を開くべきこと」を献策してゐる。ソコに大隈の無理がある——マツイ芝居を打つて了つたのだ。(世にいふ熱海會議とは右の誓約を決定したのである。即ち伊藤大隈井上の三人が十四年一月熱海の旅館で、國會開設と、新聞紙發行の密議を爲したのが、其の真相とされてゐる。)

◎大隈の私擬憲法及び國會開設要目は、矢野文雄が書いたもので、殆ど英國の直譯といふべきものであつた。伊藤が岩倉から、其の草案の寫しを受取ると、早速乾分の井上毅と伊東巳代治を呼んで、之を研究し、兩人に其の攻撃文を起草させた。そして「若し、斯の如き、憲法を御採用になるとあらば、自分は一日も大隈と共に、朝に立つことが出来ぬから、骸骨を乞ひたい」と云ふ意味の書面を岩倉宛に送つた。

◎伊藤が、大隈の行動を憤つたのは、道理として尤もらしく思はれるが、元來、伊藤は、外のことにはさうでもなかつたが、憲法制定に關することに就いては、決して、人に譲ることを欲しなかつたやうで、殆ど常識では考へられない程、神経が過敏になり切つて居たのだ。で、大隈が、密奏を企てるが如きは、到底彼の黙止さるべきことでない。俗例な大隈のことだ。マサか之れ位の機微を察せぬ譯もないのだが、此間には幾多、デリケートな事情が伏在してゐる。

◎大隈排斥の陰謀は、大隈が天皇に扈從して留守の間に、スツカリ騰立が出来上つてゐた。

そして愈々免官の勅裁を請ふと、陛下には「篤く旨を論じて、辭表を捧呈せしめよ」との御詔があつた。辭職勸告には伊藤と西郷が當つた。馬車を驅つて大隈邸に赴き、寢に就いて居た大隈を叩き起し陛下の御内命に依つて辭職を勸告する旨を述べた。大隈のことだから、何かと苦情を持ち出すだらうと期してゐたが、豫め覺悟してたものか、案外何事も言はずに承諾して了つた。

大隈と運命を共にした者——河野敏鎌外十四名の官吏であつた。其翌月に、明治廿三年を期して國會を召集するの大詔が喚發せられ、新たに松方大山福岡佐々木等が參議となり、大隈に代ふるに、士佐の福岡と佐々木を入れたのであつた。此時の事を大隈は次のやうに語つてゐる。「丁度、明治十四年十月の十一日に、七十餘日も天皇に供奉し、東北から北海道を巡つて歸つて來ると、その以前に政府は、水も漏らさぬ計略を運らして居たものと見え、御還幸の日の晩に、内閣會議を開いて、吾輩を放逐することに決し、何でも夜半の一時頃であつたらう。參議の伊藤と西郷が、わざわざ吾輩の處へ、やつて來て、容易ならぬ事情があるから、どうか辭表を出して、もらひたいといひ出した。こつちは詳しく聞かないでも、其の間の消息は大抵、解つてゐるから、よろしい、吾輩が直接、陛下に拜謁してから、辭表を捧呈すると答へると、兩人は餘程困つたらしいが、強いて、俾

めもしなかつた。翌朝、宮中に參内すると、門衛が嚴重に遮つて入れない、それから御同行申上げた、有栖川宮の邸に行くと、矢張り門衛が置いてあつて、吾輩の入門を拒絶するといふ始末。昨日までも供奉申上げた陛下にも、また親しく御言葉を賜つた有栖川宮にも、お會ひする事が出来ず、吾輩は急轉して、體のいゝ罪人扱ひに、されて了つた。免官の辭令は山田司法卿が、友人として持つて來て渡してくれた」

◎此政變の急先鋒は、黒田と伊藤である。黒田が、北海道官有物拂下問題で、大隈に反對されたことから、期せずして伊藤と握手した譯。それに、此の問題の内情が、民間に漏洩したのは、大隈一派の爲た事で、民間の輿論が、險惡になつたのも大隈が、福澤諭吉等と結んで、内閣乗取の陰謀に利用したのであるとの説が、盛んであつた。が然し此の問題の裏面には、五代と岩崎の利益争が潜んでゐる。

◎十八年十二月廿二日、内閣官制が發表され、從來の太政大臣參議卿などの職制を廢止し、新たに大臣の名稱を附せられることになつた。此時、伊藤は宮中に居て、憲法起草中であつたから、總理大臣としては、薩派の代表格である黒田を推したけれども、黒田が固辭したので伊藤が宮内大臣のまゝで總理の任に就いたことになつてゐる。

◎黒田は此時、内閣顧問といふ特殊な位置に居た。新たに内閣の首班を定むるに就いて、閣僚等の會議を開いたことがある。黒田も其の席に列した。閣僚の一部の者が、黒田に新制度の首相たらんことを望んだ。黒田も、此の大任に就かうといふ考へが、あつたらしく其の意を洩したのであつたところが、井上馨が、種々な注文を持出して、黒田を困らせ、果ては「貴方のやうに酒癖が、悪くしては安心が出来ないから、先づ禁酒することを誓つて貰はねばならぬ」とやつたので、根が、單純な黒田のことだから、非常に怒つた。「酒のことまで、干渉されるやうでは、總理大臣などは、御免を被る」と默然席を起つて了つた。

◎斯やうな譯で、總理は遂に、伊藤に極つたのである。政界側面史には、山縣が「我邦も立憲政治となり、外國との交際も従前より一層頻煩となるから、此際は赤電報が續める者でなくてははいけぬ」と斷言したさうである。赤電報とは外國文の電信のことで、暗に伊藤を指したもので、此一貫が參議等の議論を、纏めるに力あつたとされてゐる。

◎出来上つた新内閣の顔を見たと、薩四、長四、士一、其他一、薩長勢力の折半といふところだ。◎此内閣で、一番問題になつた、伊藤が總理大臣を以て、宮内大臣を兼ねた一事であつた。此は誰が考へても、實に不都合千萬な話であるが、其處には亦止むを得ない事情があつたのである。

抑も憲法取調への事業は、明治九年九月、元老院内に、憲法取調局を、設けたのが初であるが、西南戰爭が起つた爲に、自然廢滅となつた。伊藤が、十六年八月、歐洲から歸ると、苟くも國會の性質を帯びた元老院が、欽定憲法の審議立案を、するといふのは不條理だといふので、同年十一月、參事院内に憲法取調所を置き、翌十七年三月、改めて宮内省に制度取調局を設け、伊藤自ら宮内卿となつて其局長を兼ねた、憲法制度を以て一代の事業とし、全力を傾倒した伊藤に取つては、宮内大臣と稱密院議長とは、何うしても自ら、やらなければならなかつたのである。殊に十四年に、大隈から密奏を企てられた苦い經驗もあるものだから、憲法草案が出来上るまでは、宮中を警戒せねばならぬ必要もあつたのである。(此項政變物語)

◎明治の功臣中、黒川清隆位、いろんな意味で興味のある人物は少ない。一見酒々磊々の豪傑肌、夫でゐて義侠心に富んで、弱者には毎時も同情する。命に代へても一諾を重んじたものだ。榎本武揚や大島圭介の命を助けたのも彼、井上馨を不遇から、救ひ上げたのも彼、一時は大喧嘩をした大隈を、自分の内閣に引入れたのも亦彼である。屬官の病氣を聞いて、自ら粥を煮てやつたことさへある。身を卑くして、教を乞ひ、慎重審議、調査に従事することもあつた。ところが一つ、黒田には悪い癖があつた。それは酒を飲むと、誰れ彼れの別なく、言ひが、りを、つけて相手を困らすこ

とで、そして酔が醒めると、一々詫びて歩くといふ始末、酒の上から、夫人を殴り殺したとも傳へられてゐる。黒田の酒癖の悪いのには大概の者は参らせられたが、一人、木戸孝允にだけは、それが出来なかつたといふ。——何んでも、剣道の達人であつた木戸の爲めに、一度ヒドい目に遭されたことから。

二、黒田内閣出現と大隈入閣秘聞

◎伊藤は廿一年四月卅日に辭職した。之は憲法草案が出来上つて、是から樞密院の審議に附せられる段取りと、なつたからで、つまり伊藤自身が樞密院議長となる必要があつた爲めである。

◎同日、黒田内閣が出現した。かねて黒田は在野黨の頭目である大隈を引入れることに依つて民黨の氣勢を緩和し、大隈の不遇を救ひ得ると考へて居たらしい。伊藤も憲法が、既に出来上つた今日大隈を危険視する必要もない、そこで、二人の間に大隈を外務大臣に推薦する議が熟し、山縣の反對はあつたが、とも角、伊藤黒田大隈の三人が、會見しやうといふ段取まで運ばれたのである。此時であつた。藤公の腰巾着、末松謙澄が、前日私かに、大隈を訪問し「明日の會見に、貴下が何か

條件を持ち出すと、此の談判は破裂ですゾ」と釘を一本打ち込んだ。ところが翌日、黒田邸で三人が會見すると、大隈は傲然として、一通の覺書を出した。見ると「伊藤は長州を代表し、黒田は薩州を代表し、大隈は改進黨を代表したる意味に於て、聯立内閣を組織すること」とあるのだ——愈大隈が、十四年政變當時の野心を自白したやうな譯。此の覺書を見た伊藤は、フンと鼻先で笑つた。「我々は今、君の考へ一つで、陛下に推薦するか、否かと云ふことを決すればよいのだ。斯んな書類を若し、人にでも見られると大變ぢや」と言つて引き破り、ストーブに投げ込んで了つた。大隈は覺書の煙になるのを見向もしないで「イヤ是は僕が、少々考へ違ひであつた。マア、此れは此場限りの話にして……」と頭を一ツ下げさうである。——かくして曲りなりにも、大隈が外務大臣に就任したのである。(政變物語による)

◎廿二年三月、後藤象二郎が入閣したのも、大隈と同じ意味である。是れで、維新の功臣が大抵網羅したので一名を元勳内閣とも言つた。

三、第一議會と山縣の操縦振り

◎政權移動の大勢を概観すれば、初めは薩長の交代で、即ち長の伊藤に代つて、薩の黒田が出で、其の黒田に代つて、長の山縣が出で、其の山縣に代るに薩の松方、其の松方に代るに長の伊藤、伊藤に代るに薩の松方、此に代つて三度、長の伊藤が出た。之が十八年、内閣制度確立から卅一年までのこと。然るに此の間、政黨が漸次發達して、卅一年六月には、大隈が總理となつて、始めて政黨内閣が出現したのである。

◎黒田内閣は、大隈の條約改正問題で倒れた。それからホンの少しの間、三條が内大臣を以て、總理を兼攝した、言はゞ中樞内閣であつた。山縣は此間に總理大臣學の一通りを稽古したと言つてゐる。實て山縣内閣は出来上つた。そして第一議會に臨むこととなつた。元來言へば始めての議會に臨む内閣としては、憲法起草者である伊藤が、之を組織するのが、最も當を得たのであつたが、割合利口な伊藤は、此の難局に當面することを避けたのである。

◎廿三年十一月廿五日、第一回帝國議會が召集された。此の時の衆議院の分野を大別すると、野黨側一七一人に對し、與黨側は一二九人、差引き民黨は四十二人の優勢であつた。とに角、多年の言論壓迫から解放された野黨側は、事毎に藩閥政府の牙城を抜かんとして、豫算案を中心に、質問戦は全く白熱状態に入つた。乃ち大江卓を、委員長とする豫算委員會は、今から思へば嘘のやうな、

八千餘萬圓の歳出豫算を十分の一の八百八十萬圓を其中から削減するに決した。山縣首相は「議會が國政を妨げるとは怪しからん」とカン／＼に怒り出し、一時は解散と迄腹を定めた。が陸奥が政略部長となり、後藤は自由黨中土佐派の議員と、縁故の深いのを利用して、板垣を動かした。板垣も議院開設勿々、政府と衝突するやうでは、將來面白からぬ結果を、遺すから及ぶ丈、穩便の態度に出づるが、よいとの見地であつた。そこで、大江・林・片岡等舊立志社以來の乾分を口説落して廿八名の軟派議員を懐柔した結果、一四三對一五五の逆轉振りで、豫算は六百五十萬圓を削減して通過した。中江兆民は早くも議會の腑甲斐なさに愛想をつかして、アルコール中毒を、口實に議員を辭した。(歴代内閣物語・政變物語による)

四、黒幕政治

◎山縣は、第一議會終了後、間もなく辭した。そこで後繼内閣の總理を、定むることになつたが、此間薩長間に、頗るデリケートな懸引があつた。陛下からは、伊藤黒田等數人に、勅命が下つて、後繼首相決定推薦の、協議を命ぜられた。之か後來、内閣組織に出てくる元老會議の、始まりで、

當時は之は黒幕會議と稱へられてゐた。

◎此の黒幕會議が、山縣の辭職後、先づ黒田を推したが拒絶され、次に西郷を推したが、西郷も亦固辭して受けない。では薩としては、松方より外にはない。そこで黒幕連、殊に伊藤が全力を擧げて、援助するといふ保證の下に、やつと松方を引ツ張り出したのであつた。此の時分の松方は、後入齋の綽名で通り、伊藤の乾分頭位のところで、齡は、とつてゐたが威望未だしの感があつた。

◎出來上つた顔觸を見ると、薩四、長三、土一、肥一、其他三。ところが、この弱體内閣には次から次と、悪いことが續いた。成立匆々、先づ湖南事變が起つて、天下色を失つた。十月には、滬尾の大地震が突發した。翌廿五年には、有名な選舉大干渉が勃發した。實に多難な時局に際會したものである——で、黒幕内から手を執つて、引廻さなければ、どうにも動けない状態であつた。殊に湖南事變の時などは、誰れが總理大臣だか判らなかつた位である。

◎松方は、維新の功臣中でも、第三流どころで、「後入齋」の綽名を取つた位、愚直であつた。整理時代には、必要な人物でも、事變を處理して行くには、全く不適當な人物であつた。湖南事變では、何が何やら、一切夢中、伊東已代治の智慧を借りて、やつと一時を糊塗する有様であつた。

五、空前絶後の選舉大干渉

◎松方は、民黨征伐を目的として第二議會を解散した。總選舉は、廿五年二月十五日、同じ内閣の下に行はれることになつたのである。時の内相は誰あらう、人も知る巖勇子爵品川彌二郎、次官は白根專一、警保局主事には、大浦兼武といふ、とに角、一筋縄では行けぬ代物で、是等の手によつて空前の大干渉が試みられた——従つて選舉戰の劇甚なりしことも先づ前後比無しとも言ふべきで屢々流血の慘を見るの、餘儀なきに立ち至つた。特に最も甚しかつたのは、高知・佐賀・熊本・石川・富山・福島の諸縣であつた。そして其の干渉振りが如何にも露骨であつた。例へば一郡市町村に於て、警吏・郡吏・市町村吏等を擧げて、政府の爲めに、選舉場裡に奔馳し、廳舎に役人の影さへも見せなかつたと云ふ事實もあつた。上記の諸縣中、高知・佐賀は、野黨首領の出身地であり、其の勢力の中心地であつた關係として、已むを得ないが、石川縣の如きは、松田吉三郎外四名の候補者に對し、板垣大隈兩伯が、公認の廣告を北陸新報に掲ぐるや、政府は集會條例及政社法違反として、兩伯を起訴したるが如き、今日から見れば全然夢の如き事件まで惹起した。(兩伯共に廣告案を知らざりしと

の理由で免
訴になつた)

この總選挙の干渉振りには、流石の大隈伯をして、憤激の涙を流さしめたと言ふ。今左に當時、選挙に關する死傷者の數を擧げて見やう。

死 亡 高知一〇、佐賀八、福岡三、石川二、群馬一、熊本一。

負 傷 佐賀九二、高知六六、福岡六五、熊本三七、鹿児島二七、石川二四、富山二四、兵庫九、栃木八、大阪六、奈良四、福島三、大分二、千葉、和歌山、宮崎、廣島、香川各一。

總計、死亡二五、負傷三八八。以上は當時政府の調査にかゝるものである。此他に選挙を畏れて隠秘に付したものが、多數あつたから眞實なる統計は、驚くべき數に上つたであらう。當然の結果として、民黨の驕將は、續々として討死した。楠本正隆・高木正年・大井憲太郎・栗原亮一・内藤魯一・片岡健吉・林有造・武時敏・松田正久・天野爲久等是である。(日本政黨史による)

◎此の大干渉となるまでには、政府部内で、品川と陸奥の衝突があつた。元來、品川は同じく長州閥でも、頗る特殊の地位に在つた人物で、維新の倒幕運動史上では、伊藤山縣などよりも寧ろ先輩格である。が、久しく外遊してたので自然立身が後れたのであつた。だから心中は頗る不平であつたらしく「伊藤などが、僅か許りの學才を鼻にかけて、吾物顔に振舞ふのが癪だ」と云ふ態度を

持して居た。松方内閣に入つてからも、松方は勿論、伊藤黒田等も眼中に置いて居ない、況んや陸奥などは全然小兒扱ひにして居た。陸奥がなまじに政黨者流に媚び諂ふから、彼等が増長するのだとばかり遂に陸奥の所謂政略部長なる役目を自身に取上げて了つた。だから、此の大干渉も、品川の一存でやつたことで、松方は只巻き込まれたまでである。ところが品川自身も病氣で引籠り勝であつたから、實際の仕事は次官の白根と、警保局主事の太浦とで遣つたのだ。

◎此の選挙で、政府の使つた機密費は百萬圓とも言はれ、又明かな數字は六十萬圓位であつたとか所で其の始末に確と行詰つた。伊藤は松方を呼び付けて、運動費の始末を詰つたが、松方こそいゝ面の皮であつた。結果一部か、全部かは知らず、閣議に於て、各自が分擔することになり、大木などは其時、三年町の邸を賣拂つたとも傳へられる。

◎品川は之が爲めに職を辭し、以來全く政治的生命を絶たれて了つた。干渉知事の筆頭は、福岡の安場保相であつた。世間態もあるからといふので、之を愛知に轉せしめたが、安場の言ふことが振つてゐる、曰く「政府の命で、やつたことだ。本來ならば大に功績を賞されねばならぬのに、左遷とは何事ぞ」と、遂に上京して河野新内相に談じ込む始末、遂に辭職したが其頃の地方官は、まだコソコソな氣に富んでゐた。

六、最初の政黨内閣、維新以來の大政變

◎松方内閣は、選舉干渉の結果が、案外面白からず、樺山高島二大臣の辭職に次いで、遂に廿五年八月瓦解した。

◎次に現はれたのは、伊藤第二次内閣で、薩長土の元勳を網羅し、一名を元勳内閣とも稱した。時恰かも、日清役に際會したので、對外關係から、舉國一致の實を示さねばならず、こんな事情で、四年間も持續したのである。この内閣には、後藤象二郎の、取引所問題が一番世間を騒がせた。

◎廿九年九月、第二次松方内閣、即ち松隈内閣なるものが成立した。大隈が改進黨を提げ、副總理格で外相の椅子に就いたのである。

松方の後入齋と、大隈の大風呂敷との取組は、蓋し一代の喜劇だった。松方——進歩黨——大隈と、「承諾した」「どうも困る」「いや賛成した」結局松方大隈兩人の對決となる始末。歴代内閣中、内部で一番、ゴタ付いたのは此の内閣である。失政内紛百出して、卅一・一・一二、瓦解した。

(進歩黨は松方との提携を絶ち、大隈も辭表を呈出した。斯くて第十一議會に於て、自由進歩の聯合軍は不信任案を提出、可決せんとした時、解散の詔勅は降り、同時に内閣は總辭職した。)

◎大命は三度、伊藤に降つて、卅一・一・一二、伊藤直系の長閣内閣が出来上つた。伊藤は「朝に在りては、博文之に任じ、野に在りては諸君の力に俟つ」と、巧みに自由黨員を懐柔したが、板垣の入閣を井上が、極力反對したので、遂に自由黨と袂を分つに至つた。卅一年五月十四日、第十二議會は召集された。歳入不足約三千五百萬圓増稅案が、二四對二七で否決、六月十日又々解散となつた。大隈板垣は協力して、自由、進歩の兩黨を打つて一丸とし、ここに憲政黨を組織した。かくなつては伊藤も政權を維持することは出来ない。伊藤は(一)閣僚と共に政黨を組織して之に當る(二)内閣を他の閣僚に委ね下野して與黨を作る(三)憲政黨に内閣を明渡す。此の三策を以て元老會議に臨んだ。

◎伊藤は、其の以前から、自ら政黨を組織して見ようとの考はあつた。この内閣で議會を解散してからは、一層政黨に對する興味を深め、併せて憲政黨に對抗する意味からも、自ら政黨を組織しやうとし、早くも二三實業家に相談を始めたものだ。そして憲政黨結黨式の翌日(三一・六・二四)山縣外五元老を集めて、其決心を告げたのであつた。所が山縣は眉を擧めて反對し、他の元老も大體山縣と同意見であつた。伊藤は「此場合、憲政黨に内閣を明け渡すより外はない」といつて、翌廿五日閣下に伏して、辭表を捧呈した。即日御前に於て、元老會議が開かれたが、伊藤は此時、稍

酒氣を帯んで、意氣頗る衰かつた。そして、後継内閣組織者として、大隈板垣の兩人を推薦する旨を、言上したのであつた。

◎そこで即夜、伊藤は大隈板垣の二人を官邸に招いた。この三者の會見は同夜八時から、梅雨蕭々たる間に、開始された。伊藤は現下の内外事情から、一々説くところがあつたが、大隈は本命が若し降下あらば、不敏ながら國家の爲め盡力する考へであると答へた。然し板垣は飽くまでも「自分は其器でない」と謙遜した。

◎翌廿六日、大隈は板垣を、其の邸に訪ふた。曰く

「憲政黨の組織も出来たのである。伊藤が内閣を投げ出した以上は、吾々兩人で此政局を引受けるより外はあるまい、互に心を合せて、大いにやらうではないか」

「憲政黨の組織は出来たと言つても、それは只結黨式を挙げたといふ迄だ、政見を論議して肝膽相照といふところまで行つて居ない。こんな薄弱な政黨を率ゐて、不用意に内閣を引受けた所で、恐らく成功しない。引受て勿々崩壊するやうでは、獨り陛下に對して、相濟まぬばかりでない。實に政黨の權威に關する譯、辭退するのが賢い考へと思ふ」と板垣は答へた。然し大隈は「何ンでも構はぬから是非引受けるが可い」と言つて、きかない。板垣は「若し兩人の間に、意見不一致の場

合は、其議論の孰れが非なるを問はず、兩人共に身を退く事」の條件を持出した。政權慾の旺盛な大隈は「も二もなく之を承諾した。

◎翌廿七日、大隈板垣兩人に本命が降つた。本命は等しく二人に降つたので、誰れを總理にすると云ふ勅命はなかつたのであるが、板垣は自ら謙抑して總理の任を大隈に譲つたのであつた。顔觸れを見ると、進歩黨系四、自由黨系三、長一、薩一、とに角政黨内閣の實體を具へてゐた。

◎この内閣瓦解の導火線となつたのは、文部大臣尾崎行雄の共和演説である。事の起りは三一・八・二二、帝國教育會に於て、一場の演説を試みた中に「日本に假りに、共和政治ありと云ふ夢を見た」と假定せよ、恐らく三井三菱は大統領の候補となるであらう」と言つたのが問題になつたのである。尾崎は是が爲めに、職を辭したが、其の後任に關して、板垣と大隈が互に自説を主張して相譲らない、板垣は文部の後任に、江原か星を推薦するか、然らずんば大隈の外務兼任を解いて、之を星に譲るか二者其の一に決したいと要求した。ところが大隈は外務の兼任を解かないばかりか、乾分の大養を文部の後任として、内奏してゐたのであつた。この時は大隈の態度は、絶対に強硬で、板垣などは眼中になかつたといふ、異分子は寧ろ、此機會に追出した方が、よい位に考へてゐたらしい。板垣は又板垣で、参内して閣議の情況を言上する、大隈は亦、言を極めて板垣を弾劾すると

いふ始末であつた。陛下は大隈に對し「内閣組織は、卿と板垣との二人に命じたのであるから、板垣と融和するやう努めよ」と御説を賜つた。

◎閣員後任問題を、めぐつて内訌は暫らく續いたが、同年十月廿九日、板垣は一篇の書と共に辭表を捧呈した。大隈も参内して、豫ねての計畫通り、三大臣辭職に對する善後策を奏上し、後任大臣の御裁可を請ふたと傳へられる。陛下は「朕は卿と板垣との二人に内閣の組織を命じたのであるから、今日板垣のみの辭任を許すことは出来ぬ。須らく板垣を留任せしむるの道を講ぜよ」と仰せられたと漏れ承はる。

◎併し、板垣は固く御辭退申上げた。それで大隈も居据計畫が、失敗に歸したので、遂に辭表を捧呈した。所で、辭表捧呈に附加して、次の内閣組織を小臣に御下命あらせられたしとの旨を言上したと、そして居据りの奏上をしたことは三度に及んだといふ。大隈の政權に對する未練も驚くの外はない。然し、陛下には遂に之を御許ならなかつた。大隈が、明治天皇に信が、なかつたと言はれるのは、この邊のことらしい。(政變物語による)

七、肝膽相照時代

◎最初の政黨内閣である隈板内閣は、僅か五ヶ月足らずの短命で瓦解した。次は第二次山縣内閣で長四、薩四の言は、薩長最後の聯合内閣であつた。始め山縣は、自由黨と提携する必要上、二三の椅子を自由黨の爲めに、取つて置いたのであつたが、自由黨の方から拒絕して來たので、薩長折半の人選となつたのである。所が内閣成立後、双方の意見が一致したので、今度は自由黨の方から、閣員を自黨から、出して置きたいと申込んで來た。然し山縣は、親任式後になつて、それは出来ないうて拒絕した。

◎こうなると、自由黨も現金なもので、代議士會を開いて、内閣反對の決議をする始末、山縣は板垣を訪問して、再考を求むるところがあつて、結局、自由黨の主義綱領に準據するといふことで折れ會ひ、山縣は有名な「肝膽相照」の演説をやつたのである。

◎山縣は、自ら一介の武弁を以て任じ、政黨を嫌つたものである。然し彼位、政黨を操縦するに巧みな者はなかつた。一代の難物、星さへも彼の前では、我儘を言へなかつたのである。彼は増税に

よつて、多年の懸案たる軍備を擴張せんが爲め、多分の黄白を政界に散じ、或は議員歳費の値上など、議員を誘惑した。一而又、星を通じて憲政黨懐柔の策を講じ、政府との間に三十萬の現金收受が行はれたとの説さへ傳へられてゐる。

◎かくして、この内閣は、地租増徴、軍備擴張、文官任川令改正等、爲さんと欲する事は大概、爲し遂げて辭職した。時に三三・一〇・一九、終始一貫、實に幸運な内閣であつた。伊藤博文は會て次の如き演説を爲したことがある。「憲法發布以來茲に十有三年、議會を開すること十五回、此間内閣の更迭も頻繁にして、平均一年強を持續したるに過ぎず。而して此内八回の議會は予が、内閣の首班たりし時に係り、三回は山縣大將の内閣に係り。然るに不幸にして、予の衝に當りたる時は、毎に難局に屬したるも、山縣大將は常に幸運にして、一回も議會を解散したることなし。大將は餘程政治上に於て、巧妙なる手腕を有するものと見ゆ云々」

◎二度目の政黨内閣は、伊藤によつて組織された。即ち第四次伊藤内閣である。この内閣が出来上るまでには、伊藤と山縣の大確執があつた。それから渡邊國武事件といふ、明治政變中、不可思議な一事件が持上つた。伊藤も渡邊も、其真相を語らないが、政友會の總務委員は「渡邊事件の顛末」と稱する彈劾的の文書を公表した。

◎名は政黨内閣でも、閣員の素質はやはり、官僚系の人物である。純政黨育ちと言つては、松田・林・星位のものであつた。

◎此内閣は、星の收賄事件で、ヒ、が入つた。伊藤が星に對して、辭職を勸告した時は、全く前例無い位、體を盡したものと傳へられてゐる。

山縣の乾分格である清浦・平田・大浦等が、貴族院で、増稅反對をしたのが、表面上、瓦解の主因と爲されてゐる。

八、伊藤の政友會創立と金の出所

◎伊藤が、政黨といふものに興味を感じ、自ら之に采配を振つて見たいと考へたのは、第一次松方内閣當時のことであつた。然し政黨、足場を求めるとすれば、全然新たなる境地を開拓するか、在來の政黨を基礎とするか、伊藤自身の信念は、一體どうであつたらうか。伊藤が、三次の内閣の末路に、政黨組織を企てた時、伊東巳代治が、新黨を組織するよりも、自由黨を貰ひ下げた方が、宜しいから暫らく時機を御待ちあれと言つたとある。つまり此時分から自由黨に目をつけてゐたこと

は確かである。

◎卅三年七月八日、星と松田が、大磯に伊藤を訪問して、正式に自由黨の首領たらんことを懇望した。伊藤は元來、功名心の強い性格の男であるから、「乃公の食指一度、動けば大下の事亦成らざるなし」と大分自惚れも、手傳つたらしい。遂に首領たることを承諾し、自由黨は解黨、絶對無條件で、伊藤の傘下に集ることになつたのである。

◎伊藤が、政友會を創立するに、どれ程金を費つたか、そして其の金は、どこから出たものか、之に就いて、明治年間、政界の黒幕役者として、名高い其日庵杉山茂丸の、書いたものに次の一節がある。(場所は藤公の大磯の別荘滄浪閣である。)

伊藤「ウム議論はモウ仕舞ひじやが、扱て遣つて見るとしても(筆者曰く政黨組織のこと)直ぐと云ふ譯にも行かぬからネ」

杉山「ナゼでムい升、明日にも頭立つた者を、十四五人を呼び寄せて、お考の程をお申聞になつたら、三日の中に、門前、市をなし升ゼ」

伊藤「イヤ夫を云ひ出すには、多少の金も入るからネ」

杉山「金はドノ位入り升か」

詞使ひの悪い人で誰の事でもアノ奴目かと云ふやうな人(三)此人は資性正直な人で少なくとも庵主など、約束した事を決して違へた事のない人(四)此人は常に電車や鐵道の事を計畫して絶え間なく其事業に關係して居る人(五)常に一向宗を信じて侵し難い信念のある人(六)庵主は此人が頼んだ事は決して人事と思はず熱心に世話をして其成功を助けるを興味とせし事(七)此人が或時庵主が碌な世話を爲たとも思はぬのに或る仕事に大成功をして巨額の金儲けをしたと云ふので百圓紙幣を幾束か新聞紙に包んで庵主に與へんとした事があつた(八)庵主は平生金の入用なき男故其金を取る事を好まず返戻した事もある事

庵主は早速此人の宅を訪問して、一室にて面會して左の事を云ふた。

杉山「君は此間、僕に金を遣ると云ふて、持つて來たが、アノ金はマダあるかへ」

其人「ムウ有るよ、アノなりに銀行に、放り込んで置いた」

杉山「夫があるなら、今僕に金の入用が出來て來た。其譯は伊藤公と、斯くく筒様くく之行掛りとなつたから、十萬圓丈僕にくれぬか」

其人「十萬圓は少し多いが、何とかならぬ事もあるまじ」

杉山「イヤ十萬圓出來ても、夫には條件がある、君は十萬圓を、僕に遣つた上に、妻君と共に、

此佛壇の前で堅い誓ひを立て、伊藤公の存生中は、僕に十萬圓の金を遣つた事を、死でも決して他言せぬと云ふ誓ひを立て、くれ、夫が出来たら、僕は喜んで貰ふ、明朝又來るから夫までに、考へて置いてくれ給へ」

其翌朝、訪ねて見ると其人はマダ夫婦で、珠數を首に掛けて佛壇の前で、盛んに讀經をして居た。暫く其後に待つて居ると、佛前に供へて居た紙包の金を引下して、之を庵主に與へた。庵主は謹んで之を受取つて、其足で大磯に駆け付け、直ちに伊藤公に面書したら、公は縁先の椅子に寝て居られた。庵主は直ぐに何時も、公のデスクの横手に置いて居らるゝ鱔皮の大「カバン」の口を引明けて、其紙包を入れ、公を顧みて

「お約束の金は、此「カバン」に入れて置升たよ」

と云ふと、公は起直つて、立つて行つて其「カバン」を引明けて、紙包を開き、

「是は金が、澤山あるではないか」

と云はるゝから、

「多くはありませんが、屹度夫れ丈けは入り升よ」

と云ふて待たせて置いた車に乗つて、飛ぶが如くに停車場へ來て、汽車に乗り、東京に歸つて來

た（以上の事は去る二月七日（大正十三年）に、今芝の高輪に住する其或る人を呼んで、此金の事を、山縣公の傳記の中に書く事を承諾を得て置いたのである）

此の或る人とは、誰れのことであらう。筆者の推測では、多分頭にネの字のつく人ではないかと思ふのである——單に文字上からの推測に過ぎないが。

九、新人興起、情意投合時代

◎明治の功臣と稱せられて、政局の中心に立つた者のうち、第一流の人物は大久保の死を以て一段落となつてゐる。第二流の人物としては伊藤の第四次内閣瓦解と共に一段落となつてゐる。これから後は、第三期の新興人物に依つて、政局の中心が、動かされることとなつた——桂内閣の成立が即ち是れに當るのである。別の言葉で言へば、藩閥内閣より官僚内閣に轉化して來たのだ。

◎桂が、總理になつたのは、五十五歳の時であつた。山縣は此時、桂を子供扱にして「桂ではまだ政治に慣れない」として非常に、心細がつたといふことである。伊藤は、桂の出馬には頗る不快の感を、持つてゐたさうだが、他に良策もないので、桂を引張り出したのださうな。杉山茂丸は桂内閣

出現の重要な、黒幕師の一人であるが、其の書いたものによると、「今、庵主(杉山)が困り抜いて居られる井上侯兄玉伯の御使で、山縣公を往訪して、其後で陸軍側から内閣の候補者が出たら、是は屹度、山縣公の指金と、伊藤公が覺られたら、事が纏まらぬぞ、全く井上侯兄玉伯の考から、出て來ねばイカぬぞ」先々とあるのは、當時、伊藤山縣井上等のデリノートな、感情の交叉を察するに足る好資料である。

◎出來上つた顔觸を見ると、重要な椅子は長閑の出を以て固めて居り、純然たる山縣系の内閣である。閣僚の人選で、桂の一番苦心したのは、會根の大藏と、小村の外務であつたさうな、會根のやうな無經驗な男を、大藏に据えたのは何ンと言つても無鐵砲であつた譯。

◎伊藤は、桂を推薦したものの、内心では、桂は何うせ内閣を組織し得まいと、見縊びつて居たらしかつた。所が、意外にもスラ／＼と出來上つた内閣の顔觸を見ると、平田だの、清浦だの、龔に貴院で伊藤を苦しめた連中が、ズラリと列んでゐる。伊藤や政友會の連中が、之を見て扱て、奈何の感を起したか、想像に餘りある。

◎伊藤は、政友會總裁のまゝ、十六議會の開會を前に控へて、外遊の途に就いた。同時に、黨員に告ぐるに、輕舉妄動して、漫りに内閣に反對することを戒めてゐる。憲政本黨は、政府と結んで、

黨務を挽回せんと企て、十六議會に臨むに當ては、桂内閣の財政計畫を、歡迎するの態度を示した。で此時の黨派は、政友一五八、憲政本黨七三、三四俱樂部三〇、帝國黨一三、無所屬二七、即ち政友會は、絕對過半數を占めてゐた。

◎井上馨は、政友會が十五議會の行き懸り上、桂内閣と、衝突せんとするの勢あるを見た。それで外遊中の伊藤に打電して、其の意見を問ふたところが、伊藤から、かう云ふ電報が來た曰く「國際競争の現状は鞏固にして永續すべき政府を要するが故に國家的重大の理由なくして内閣に反對する者には拙者は同情する能はざる旨諸氏に御申聞けありて差支へなし」と。井上は此の電報を、密かに原敬に示し、之は單に伊藤と我輩と、友誼的に取り交はした電報ではあるが、諸氏に申聞けありて差支へなしと言つてあるから、秘密にする必要もないけれども、先づ以て、松田と末松と二人に見せて、其の他の者には、暫く秘密にして居て、貰ひ度いといふのであつた。(政變物語)

◎かくして、對政黨關係は、種々な曲折があつたけれども、時恰も、日露の風雲が、急なるの時であつたから、舉國一致の立場からして、在野各黨は一齊に、此の内閣を支持したのであつた。桂と政友會の、別言すれば官僚と政黨との、妥協とも、又情意投合の第一歩でもあつた譯である。

◎第一次桂内閣は、四年七ヶ月といふ、歴代内閣中、一番長命な内閣であつた。日露戦後は、桂の

官僚派と西園寺の政友會と、二元對立の形となり、互に妥協して十年近くも、太平の夢を食つたのである。桂は才氣煥發、ニコボン式の如くない應酬で、うまく政權亡者達を操つたものだ。原が或人にかう云つた事がある「妥協は一度でも政友會から、申し出たことはない。桂の方から妥協して呉れと頼むものだから、政友會の根本政策を破壊しない限りに於て應諾したのである」と。

◎桂は此間に、二度政權を握つた。そして日英同盟を結び、露國と戦つて捷ち、朝鮮を併合した。事蹟の上からせば、満點に近いものであるが、それでゐて世人の桂を見る、伊藤は勿論、山縣にも及ばず、山本にも如かずとするのは何故であらうか——つまり鐵腕的の創作でなく、他力本位の妥協を以て、終始したからである。然し晩年には、いくらか目覺むるところがあつたやうである。

◎伊藤は卅六年七月、西園寺に政友會總裁を譲り、樞府に入つた。西園寺は、桂の後を受け、政友會を基礎に、二度内閣を組織した。桂が才氣煥發なるに比し、西園寺は飽迄着實で、政權慾に恬淡なること、公の如きは稀である。

◎妥協は畢竟、妥協以上には出ないものである。どちらか一方の分銅が、重くなると、中心がとれなくなるやうに、一人立ちを、しやうと思へば、一方を見捨てなければならぬ。十年間といふもの政界には、どうやら中心がとれて、共歩きが出来た。が、共歩きは何かと面倒である。桂も一人歩

きが、支度くなつた。政友會も、何時まで厄介者を背負ひ込んで居らねばならぬものでもない。立派に一本立の出来る自信がある。機は熟して、第一弾は放れた——二師團増設問題である、第二弾は桂の新黨組織であつた。

之を契機として、大正政變の序幕となる。

一〇、大正劈頭の政變

◎第二次西園寺内閣互解の、導火線となつたのは、二個師團の増設問題であつた。之は時の上原陸軍大臣が提案したのであるが、内部はやはり長閑の使彦から出たとも言はれ、とに角、西園寺を始め政友會の閣僚は、之を黙殺しやうとし、陸相から提案を握り潰すこと三ヶ月以上にも及んだ。西園寺は内閣組織の當時から、増師反對を表明し、財政状態の許さざる間は、斷じて之を實行しないとの信念が、一貫してゐたのである。

◎上原陸相は、増師案が納れられぬ爲め、新帝に拜謁、單獨で辭表を呈出した。西園寺は、山縣等の長閑元老に、陸相後任の斡旋を、乞ふたが容られず、遂に總辭職を決行した。時に大正元・一二

◎桂が、新帝踐祚後、間もなく宮中入りをさせられたのは、言はゞ長閑元老が、桂の頭を抑へにかゝつたのである。日露戦争後の桂の境遇は、あまりに幸運に、そして餘りに順調に過ぎたものであつた。一は明治天皇の御信任が、特に厚かつた爲めもあるが、十年前には、山縣などに子供扱にされたいと思ひ至ると其の跳躍振りは、如何にも異數であつた。

韓日台の爲めに、彼が人臣の最高位たる公爵に上りたるの一事は、少からざる物論を天下に生じ、少からざる不快を、彼の先輩同輩の間に醸し、少からざる當惑を、彼の政友、後進に來し、而してアンチ桂の空氣を捲き起す可き機會を、彼の敵に與へたり。惟ふに彼は當初に於て、是の一事が此の如き、深甚痛酷なる影響を、彼の政治的生涯に齎らす可しとは、豫期せざりしならむ。然も事既に成る、之を追ふ可らず。從來とんく調子に上り來れる、彼の政治的生涯も、此を限界として、愈よ曲り初めたるぞ是非もなき。(大正政局史論)

傳傳で敏感な桂のことだ。マサか人間通有の燒餅根性位が、之を察せぬ譯はない。然るに此の時の桂の心境は、長閑の先輩などは、實際に眼中に置いてなかつたし、政友會とても、決して恐るべきでなかつた。乃公一度起たば政黨の一や二は立ち處ろに出来るんだ位の抱負であつたのである。

◎桂が其前、外遊の途に就いたのも、來るべき政界の風雲に乗ずる爲めの一準備であつた。即ち播土重來、躍進の途上に上らんが爲めであつたのだ。此の野心の多い一代の幸運兒が、どうして官中の奥深く、ちつとして居られる譯のものでない。長閑の先輩が如何に抑へ付けやうとしても、反撥して來るのは當然で、身は官中に在つて、政界に虎視眈々たる有様であつた。

◎西園寺が辭すると、後繼者の詮衡に就いて、元老會議が開かれること、前後九回に及んだ。が此の難局を、引受けるに足る者を見出せなかつた。ソコで元老等は、好もしくない次第ではあるが、デハ桂にもう一度、出て貰はうと評議は一決した。桂は官中奉仕、僅か半歳にして、組閣の天命を拜受し、純然たる桂一派を以て三次の内閣を組織した。

◎ところが、この前後に當つて、國民の輿論——といふよりも寧ろ新聞紙が、一齊に軍閥と官僚政治家の専恣横暴を痛撃し出した。つまり桂が官中府中を、混同して、勝手な野心を遂げることを憎んだのである。それにもう一つ、從來のやうに政友會と結ばなかつたのみでなく、腹心の後藤新平を參謀格として、新政黨の組織を企てた爲め、議會では野黨各派が結束して反對し、組閣匂々、内閣は不信任案をつきつけられて了つた。

桂内閣成立の報が傳はると、桂が屢々詔願を濫奏して之を自家の便宜に供した。この一事

のみでも大いに責めなければならぬ、そこで政友會・國民黨・無所屬團及び新聞記者團は、尾崎大養を中心として、憲政擁護會なるものを組織し、其大會を歌舞伎座に開催した（大元・一一・一九）來會者は板垣老伯を始め、二千餘名に上り、本多精一は記者團を代表して左の如く述べた。今や本大會に依りて帝國憲法が長夜の眠より覺めんとしつゝあり。而して難産に健兒なし將に組織せられんとする桂内閣は難産に非ずして流産内閣なり。嗚呼今日は閥族が西園寺内閣を倒せし根本的主義の政戦にして桂内閣の政綱政策に立ち入るが如きは本末を顛倒せる因循者流の言なり。桂内閣の看板に偽りあるは既往二回の内閣之を證明せり。今日は實に閥族と民族との戦なり。官僚主義と民政主義との闘なり。而して民黨大聯合の進軍に向つて肅々堂々一步を轉じたるものなり。（日本政黨史）

◎憲政擁護閥族打破の叫びが、全国的に擴り、議會は停會又停會を宣し、帝都には燒打騷擾が起つた。國民新聞を始め、政府の御用新聞は民衆の爲めに破壊されること數次には及んだつまりこの騒ぎは、軍閥の増長と、桂の飽く無き政權慾に反抗したのである。

◎大養や尾崎などが、憲政の神様など、煽て上げられたのも、此の時分のことであつた。然し長閥の頭目である桂が、政黨を組織するといふのは、何んにしても、立憲政治には喜ばしい現象でな

ればならぬ、大衆が立憲的に目覺めて來たのは、此の政變が、動機するやうである——とは當時の極めて公平な批評であつた。

◎議會と民衆の包圍攻撃に遭つては、追がの桂も政權を維持することが出来なくなつた。此間、何とか妥協の途はないものかと、例の妥協辭が持上げて來た。先づ西園寺と折衝するところがあつた。それで西園寺は、御前に召され、時局拾收の勅語を賜はつたのである。

大正政 山本伯が突如として、桂公の邸前に現はれたるは實に此時なり。山本伯は曰く「政界紛糾を極む、此際傍觀すべきに非ず、現地位を西園寺侯に譲り、平和に時局を解決しては如何」と。桂公之に答へて曰く「昨年末、他の推薦に依り、大命を畏みて就職したるも、斷じて地位に戀々たるものにあらず、現に昨日、西園寺侯と懇話して、侯の内意を叩きたるに、侯は驟起の意思なく準備なしと答へられたり、侯は目下御沙汰を拜して、時局の善處に盡力中なり」と。山本伯はこれに於て、疾風の如く政友會本部に赴けり——其後の事は語るの要なし（中略）西園寺侯も先刻自ら、加藤男と答へる言を一變して「予は御思召を拜したるも、諸君は議員の權能に依て、自由の行動を執るべし」と激勵せり。十年蟄伏せる山本伯が、彗星の如く出現して、桂公を訪ひ、政友會本部に馳れるは何が故なりや。當日午前九時までには確かに御沙汰の旨に答へんと、斷言せり。

西園寺侯が、違勅の大罪を犯すをも顧みず、却て議員を鼓舞激勵せるは抑も又何等の奇怪事ぞやかくして命數九十三日で、内閣は倒れた。桂は「權兵衛が何が」と口惜しがつたが、もう遅い。政權は既に權兵衛の手中に落ちて居た。

◎大正一次の政變は了つた。

山本内閣は、薩と舊官僚と政友會との交交で出来上つた。在職一年、財政も整理した。行政も整理した。前内閣の爲し得なんだことまでも爲し遂げた。

卅一議會は開けた。山本が之に臨んで挨拶するや、意氣颯爽、音吐朗々、鐵腕宰相の貫録は充分に具へてゐた。山本は實に、近來にない宰相として、與黨は勿論、反對黨さへも支援を惜まなかつた。恐らく山本一代の中、最も得意な場面であつたらう。然るに人事は、とかく意のままにならぬもの、實に意外の邊から破綻を來たすものである。シーメンス事件が突發して、山本の舊傷が、暴露れることになつたのだ。

◎事は卅一議會に起つた。大正二年一月廿三日の新聞紙は、倫敦特電として、一齊に左の記事を報道した。

伯林來電によれば曾てシーメンスシュツケルト電機製造會社の東京支店のタイピストたりしカー

ル、リヒテルなるもの二年間の懲役に處せられたり。其理由は脅迫の目的に使用する爲め或る重要書類を盗みたる爲めにして證據物件たる該文書は日本海軍の注文に關係あり。リヒテルは會社に對して之を二千五百磅に賣らんと試みたるも會社は之を拒絶し犯人を警官に引渡せるなり。犯人の言ふ所によれば會社は日本の高官に賄賂を贈れりと(中略)リヒテルの公判中被告が窃取せる書簡の一節に曰く「岩崎提督との舊契約今尙繼續し何等の故障なく行はれ居れるに在倫敦藤井提督と新たにコムミツシヨンの契約を締結するは眞に罪惡なり。英國に於て建造の軍艦一隻に對し五分其の他の注文に對しては二割五分のコムミツシヨンの如き新契約を藤井提督と締結するは何故なるや」云々。(倫敦路透電報)

藤井提督とあるは、機關少將藤井光五郎、岩崎提督とあるは、海軍豫備少將岩崎達人のことである。

◎同日、豫算總會席上、島田三郎が、右の電報に據て、挺身以て問責の巨彈を、當局に放つた。事件の真相が判明するに連れて、世論囂々、追が剛腹の山本も兜を脱いたが、海軍査問會、司直の活動を俟ち、疑獄の中心人物が、續々拘引されるに至つた。殊に貴族院に於て、村田保が、議員の職を拜辭してまで、山本首相の不徳を痛責するところがあつた。

山本個人が、利權に如何なる關係ある乎、否乎は天下未だ其の實證を擧げたるものなし。されど海軍が、帝國の海軍よりも、寧ろ山本一派の海軍たる事情は、天下を擧げて皆な認めたる所なりき。但た山本の勢力餘りに偉大にして、何人も後患を恐れて、之に指を著け得たるものあらざりしのみ。而して軍人の面を被りつゝ此の海軍を利用して私利を營む輩の少からざりし事は天下の齊しく、猜推したる所たりしも、其事餘りに重大なるが爲めに何人も、公然之を口にし得たるものあらざりし也。(大正政局史論)

◎鐵腕宰相として、囑望された山本も、此の事件の爲めに、政治的に葬られたばかりでなく、世道人心に、拭ふべからざる悪印象を残して了つた。かくして豫算は、貴族院で、不成立となり、内閣は總辭職した。

◎山本の失脚した後、大命は清浦奎吾に降下したものの、海軍は、どうしても承知しないで、流産し、有名な鯉香内閣の異名をとつて了つた。

◎それで今度は、早稻田の大隈が、七十五歳の老軀を提げて、出馬することゝなつた。

出來上つた閣僚の顔觸を見ると、大隈一派の舊黨員や、桂の殘黨から成つてゐて、海軍丈は非薩派の八代大將を起用し、補兵衛の芋蔓を、根抵から退けることゝなつた。

◎大浦と原が、内相の椅子に就くと、必ず札付知事を更迭した。先づ大浦が、政友會の黜竦知事森正隆外、原の乾分を黜首して、大浦直參を以て之に代へた。原の時代になると、今度は大浦の乾分を追ひ出し、先に大浦の爲めに黜首された浪人知事を拾ひ上げる——こんな風に二人が報復的にやるのだ。宛で子供の喧嘩と變らない。

◎山本が、失脚した爲めに、一番大きな打撃を蒙つたのは、政友會であつた。さなきだに醜聞の絶えない大政黨のことである。權兵衛の方よりも、この方が寧ろ問題にされ勝ちであつた。

◎大隈が多年の政敵である政友會の根抵を、覆す時が来た。即ち先づ、議會を解散した。そして大浦兼武を内相に据えた。總選舉の結果は、大浦の棟腕にもよるが、政友會は半減して第二黨に轉落大隈黨は大々的の勝利を贏ち得た。

◎所が大浦の干渉が、餘りに藥が利き過ぎた爲めか、買収事件で告發され、内閣は一旦、辭意を決定したが、優詔を拜して留任、同時に閣僚の大改造を斷行した。無論大浦は問題が、喧しくなつて來たので、政界を引退し、鬼をつけた。

◎其の時のこと、大浦の親分山縣は、大隈が、大浦一人を見殺しにしたのを、大に憤つて、「大浦が可愛相だから、見舞に行く」と言つて、聞かないので、平田などが、其れ許りはと袂に、すがつて

諒止したといふことだ。

◎大浦の事件は、其の裏面に、尾崎の幕僚と大浦の乾分との経緯があつた。政界側面史に「尾崎氏の幕僚を非常に立腹せしめたのは富山市の一件である。富山市では岡野善次郎が、同志會候補者として打つて出た。之に向つたのが中正會の高見之通氏である。親分の尾崎にして見ると是非、高見氏に勝たせたいのは人情の常だ。そこで中央部の議にも上つたが、どうしても折合が付かぬ。失れで已むなく兩氏の自由競争に任すこととなつたが、大浦氏はどうしても直接間接に岡野氏に應援しなくてはならぬ事情があつた。岡野氏に應援することは結局、高見氏を不利を與ふることになる。此の情報が手に取る如く、司法省に達するので、尾崎氏の幕僚は、非常に立腹したが、力及ばず高見氏は終に惨敗した」云々と。尾崎が、大浦の事件が、摘發せられるのを、心地よげに傍觀してたのも故なきに非ずだ。

◎一旦は大改造によつて、居据つたが、既に龜裂が入つて居たことであるから、次の議會で、貴族院の陰謀に中られ、在職二年半で互解して了つた。時に大正五年十月。次の内閣は、寺内尖頭伯を首班とする超然内閣であつた。

一一、日本政黨小史

我國政黨の濫觴は、明治七年、板垣退助等の組織した愛國公黨である。それから十四年に、正式に自由黨が、結黨するまでは、言はゞ政黨の搖籃時代であつた。此の自由黨が、十七年に至り、集會條例の爲め一日解黨。二十年後藤象二郎の大同團結に、舊黨員擧げて之に加盟、廿二年後藤が入閣するに及んで、政社、非政社に別れ、前者は大同俱樂部を、後者は大相協和會を孰も組織す、翌年、大和協和會は更に、自由黨を再興、大同俱樂部の一部は分れて、愛國公黨を組織す。廿三年是等を合同して、立憲自由黨組織、翌年、星亨の提議にて立憲の二字を削る、卅一年、大隈板垣の提議成り、自由改進の兩黨、合同して憲政黨を組織す。同年十月、隈板内閣の内証にて、自由黨系は新たに憲政黨を、改進黨系は憲政本黨を孰も結成、卅三年、伊藤博文が憲政黨を解黨して、新たに立憲政友會を組織し、以て今日に至る。大正十三年、一部の者分れて政友本黨を結成、後に此の一部の者、更に分離して政友會に併合し、殘黨は憲政會に併合す。

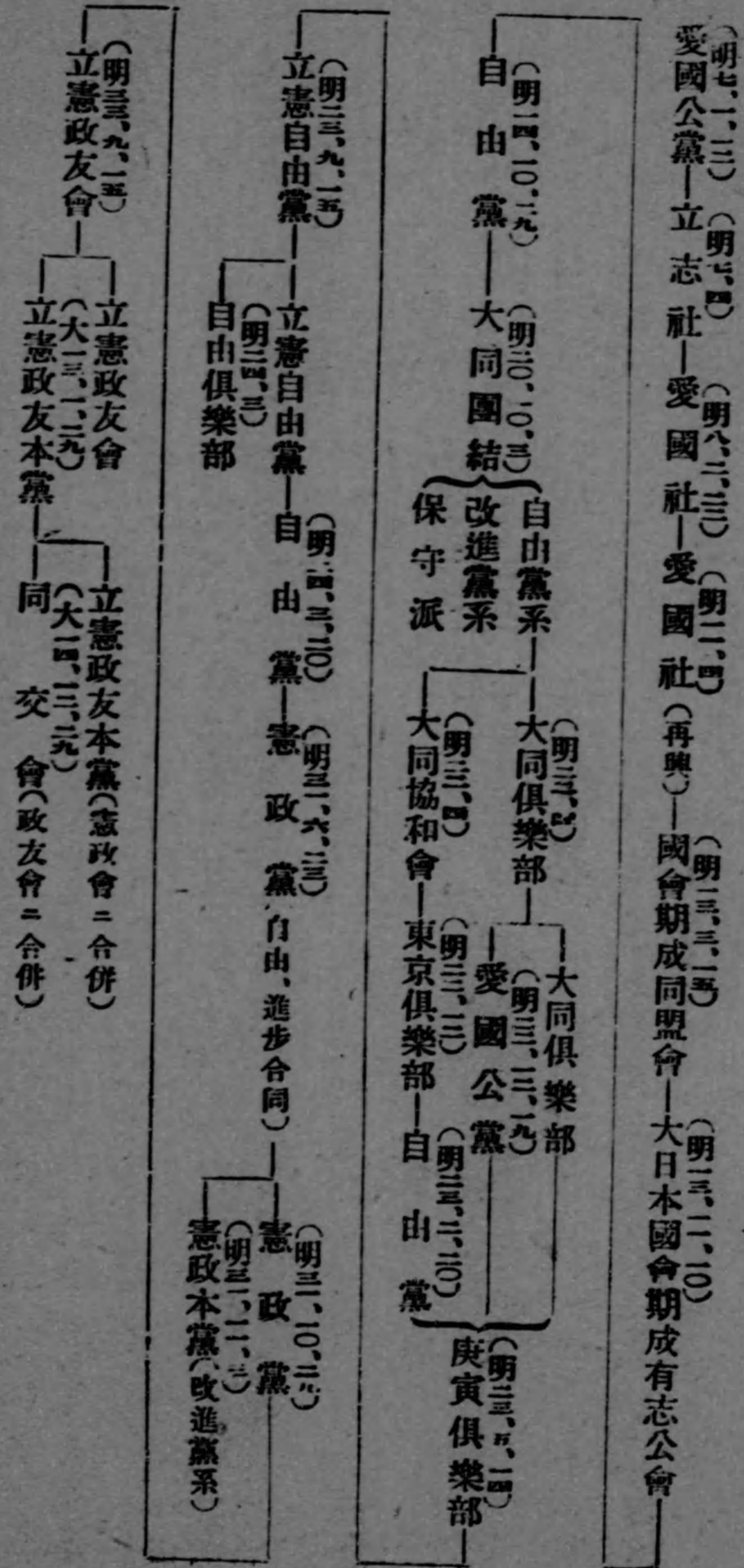
立憲改進黨は、明治十五年、大隈重信河野敏録等によりて創立せらる。十七年、解黨問題にて分

裂し、沼間守一等残留す。二十年、後藤象二郎の大同團結に加盟、廿九年、自黨外四黨を合同し、て進歩黨と名づく。卅一年、自由黨と合同して憲政黨を結成、同年十一月、分れて憲政本黨を組織す。四十三年、自黨外二小黨無所属等を合同して、立憲國民黨と稱す。大正二年、桂太郎の新黨組織するや、一部の者別れて之に加盟、中央俱樂部と合同して立憲同志會を結黨す。大正五年、更に二小黨を合同して、憲政會と改稱す。昭和六年、政友本黨を合同して、立憲民政黨を組織し、以て現在に至る。國民黨直系は、大正十一年、革新俱樂部と改め、同十四年、一部の者は政友會に併合し、残留者は新正俱樂部を組織したるも現在なし。

以上の二つが、我國の二大政黨として、現存してゐるものである。此外に吏黨と稱するものがあった。最初に出來たのが、福地源一郎等の立憲帝政黨である。議會開設後では、大成會といふのが、之に近いもので、品川彌二郎の率ゐた國民協會、大浦兼武の率ゐた中央俱樂部などが著名なものである。(二大政黨系圖参照)

二大政黨系圖

(自由黨系)



(改進黨系)

(明二五、三、一四) 立憲改進黨 (鳴鳴社、東洋
議會、鳴渡會) — (明三〇、〇、三) 大同團結 — 自由黨系 (明二九、三、一)
改進黨系 — 進步黨 (立憲改進黨、立憲改進黨、帝國財政革
保守派 (新會、中國進步黨、大手俱樂部合同))

(明三三、六、二〇) 憲政黨 (自由進
步合同) — (明三三、一〇、二九) 憲政黨 (自由黨系) — (明四三、三、一四) 憲政本黨 (無名會)
憲政本黨 (又新會、無所屬合同) — 三四俱樂部

立憲國民黨 — 革新俱樂部 (大二三、二、八) (立憲國民黨、無所屬俱樂部) — 革新俱樂部 (政友會二合併)
(大二三、三、三三) 立憲同志會 (立憲國民黨、中央俱樂部無所屬合同) — (大九、一〇、一〇) 憲政會 (立憲同志會、中正會交友俱樂部合同) — (昭三、六、一) 立憲民政黨 (憲政會、政友本黨、新
正俱樂部、無所屬合同)

昭和十一年八月廿七日 印刷
昭和十一年八月廿日 發行

明治・大正政變秘話

定價十錢
(送料二錢)

著者 千田理示造
發行者 東京市麹町區有樂町二ノ二 森田益雄
印刷者 東京市芝區新橋三ノ二〇 荻四郎
發行所 東京市麹町區有樂町二ノ二 森田書房
電話銀座(57)二二五二三番

中部配給所 愛知縣寶飯郡豊川町知通十 森田書房 中部支店
西部配給所 大阪府豊中町櫻塚一、一〇七 森田書房 西部支店
北部配給所 新潟縣三條市田島三三四 森田書房 北部支店
京阪神特約店 大阪市北區堂島上二ノ二五 新正堂書店

有所權版

【特約】 東京鐵道局公認 (鐵道保養會・鐵道弘濟會・鐵道授產會)

りあに店書名有・ドンタス開新頭街・ドンタスムーホ・店賣野各

目書行刊房書田森 賣即子册 會及普

Table listing various books with columns for author, title, and price. Includes titles like '谷孫六著 世渡り秘訣百ヶ條' and '高素之著 人は何故に貧乏するか'.

目書行刊房書田森 賣即子册 會及普

Table listing various books with columns for author, title, and price. Includes titles like '高素之著 人は何故に貧乏するか' and '高素之著 あばたはるくぼ?'.

既刊書御注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は當書房又は最寄書店へ。送金は振替又は郵便切手のこと。

子册刊新最の房書田森

片山 隆著	獨裁三人男 (その後のヒットラー！) 蔣介石・ムツソリニ)
千田理示造著	明治・大正政變秘話 (物語)
新富成男著	昇給の要訣五十ヶ條
大原一雄著	日本を荒すスパイ群
千田理示造著	明治八人女
難波篁人著	三年で五倍になる株十三種の研究

用代券郵 (錢二料送) 錢十各價定
てに手切錢二

目書行刊房書田森 賣即子册 會及并

八木信著	映畫界の裏面	價一〇	送二〇
白須賀	魔都「上海」の戦慄	價一〇	送二〇
國社編	二・二六事變の斷罪	價一〇	送二〇
直樹	近衛文麿公を語る	價一〇	送二〇
種原	「實話」無人島漂流奇譚	價一〇	送二〇
小笠原	選手權大會豫想	價一〇	送二〇
ベリス	全日本選手權大會豫想 (陸上・水上豫想)	價一〇	送二〇
成男	オリズムピック早わかり	價一〇	送二〇
千田	明治・大正・昭和事變、事件史	價一〇	送二〇
新富	昇給の要訣五十ヶ條	價一〇	送二〇
千田	獨裁三人男 (その後のヒットラー！) 蔣介石・ムツソリニ)	價一〇	送二〇
片山	隆著 獨裁三人男 (その後のヒットラー！) 蔣介石・ムツソリニ)	價一〇	送二〇
千田	理示造著 明治・大正政變秘話	價一〇	送二〇
新富	成男著 昇給の要訣五十ヶ條	價一〇	送二〇
大原	一雄著 日本を荒すスパイ群	價一〇	送二〇
千田	理示造著 明治八人女	價一〇	送二〇
難波	篁人著 三年で五倍になる株十三種の研究	價一〇	送二〇
鳥影	著 山の不思議海の怪異	價一〇	送二〇
内田	著 轉向のソヴェート	價一〇	送二〇
藤波	著 持株を處分する急所	價一〇	送二〇
藤波	著 新ふたりは若ア！ (昔き日の思ひ出話)	價一〇	送二〇
千田	理示造著 明治八人女	價一〇	送二〇
千田	理示造著 博士物語	價一〇	送二〇
千田	理示造著 全國中等學校野球大會	價一〇	送二〇
千田	理示造著 三年で五倍になる株十三種の研究	價一〇	送二〇

○既刊書注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は當書房又は最寄書店へ。
送金は振替又は郵便切手のこと。

河野嘉鶯著

定價三十錢 (送料四錢)

「絶対正」(續編) 智慧の海

「神—全體—壹—力—」

- 人の道で心境の進まぬ人
- 生長の家を早解りしたき人
- 現代社會の行詰りを嘆く人
- 家庭苦を切り抜けんとする人
- 明るい心になりたい人

は先づ本書を百讀せられよ!

森田書房版

法學士 鈴木日出輔著

定價十錢 (送料二錢)

スペインの動亂と
歐洲の危機

血と砂のスペインに勃發した左右兩翼の死
の抗争は全歐に波及しつゝある。
戦慄のスペイン動亂の真相とこれが全歐に
そして全世界に如何なる影響を及ぼすであ
らう

森田書房版

東京市内で一番よく賣れる

讀賣新聞

朝刊二十頁
夕刊八頁

東京座
讀賣新聞社

新のみもみの雑

新のみもみの雑

★新のみもみの雑★

内容純粋度

娯楽 68%
修養 12%
實用 20%

話の王国

全国書店・ホームステ
ンド・古書店に有り。品
切れの際は本社宛(切手十
二圓封入)第一報を乞ふ。

金十錢
郵税五厘

— 行 發 —

東京 新報社 話の王国 東京市 麹町区 二丁目 三ノ二番 有
三四八八八